

## 第50回 関東甲信越静社会教育研究大会 埼玉大会参加報告

新潟市社会教育委員 杉山 節子

### 1. 大会の概要

#### ・大会スローガン

「今、時代が変わる 人が変わる そして社会が変わる！一さあ動き出せ “学び” の先へ」

#### ・研究主題

「あなたはどうか生きる？人生100年時代！一主役はあなた 明るく心豊かな社会の実現」

#### ・大会の日程

令和元年(2019)11月7日(木)―8日(金)

### 2. 第1日目の活動

(01)日時 令和元年(2019)11月7日(木) 12:00～17:15

(02)会場 ウェスタ川越

(03)日程

・12:00～12:45 歓迎セレモニー(埼玉県立飯能高校 チアダンス部、川越鳶組合)

・12:45～13:15 開会行事

・13:15～14:45 基調講演

演題「学びがひらく 豊かな人生」(講師;学校法人文教大学学園理事長 野島正也氏)

・15:00～16:30 シンポジウム「あなたはどうか生きる？人生100年時代！」

コーディネーター：加藤大輔氏(日高市高萩北地区青少年健全育成の会 理事)

アドバイザー：小池茂子氏(聖学院大学教授・元さいたま市社会教育委員)

シンポジスト：羽石貴裕氏(NPO 法人彩の国自然学校 C' S 代表・埼玉県社会教育委員)

平野和弘氏(駿河台大学講師・飯能市社会教育委員)

田中悠子氏(快サークルコロネット代表)

福山瑞稀氏(本川越駅観光案内所勤務 県内在住大学生)

・16:40～17:15 閉会行事 大会宣言、次年度開催・新潟大会 PR

(04)所感

「超高齢化社会」に向かって進む社会に対してどのように対応するのか。これは、全国的・全世界的な課題である。そのような中で、「人生100年時代」という言葉が一般的に使われるようになってきている。実際に統計からみると、1963年に153人であった100才以上の方の人口は、1980年には968人、2019年は71,203人と、確実に増加している。この数字レベルでは、100才まで生きるとことに対する実感にやや乏しい気もするが、この問題は、絶対に考えておく必要のある課題である。

本大会の基調講演とシンポジウムを拝聴し、次の二点が若い世代の課題となることを実感した。一つは、現在の子どもたちの世代が、人生100年時代を夢あるものとして捉えることが大切であること、二つ目は、学びの場所は学校教育だけでなく、何歳になっても学ぶ姿勢を貫くことが大切であること、この二点である。

また、既に定年を迎えている団塊の世代と呼ばれる層の方々には、これまでの社会経験で学んだことをもう一度学び直す気持ちをもって臨むことが必要である。この世代は、仕事の面でも「上下関係」の世界に生きてきた人が多い。しかし、100年時代の人生後半は、上下関係の世界ではなく、説明・説得することを念頭に、実際に対面して話す姿勢が求められる。今までの人生で培った思い込みをもう一度考え直す必要があるのである。

また、地域の教育施設で重要な位置を占めている公民館も、大きく変わる必要がある。公民館に行った経験のある人が統計的に約30%に留まっていることは、今後の公民館の運営に更なる工夫が必要であることを示している。今後

の公民館のあるべき姿として、(1)新しいことに出合う場の提供、(2)人と交わる機会の提供、(3)そこに行けば楽しいことがあることを広くアピールすること、これらの活動を通して、公民館が地域活性化の中核となり、モデルとなる必要がある。

人間は社会的な動物であり、社会教育は今後も重要性を増すであろう。社会教育を通して、人は地域の中でやりがいを感じ、元気に生きていくことができる。

そうした場を提供する社会づくりの中で、社会教育委員の役割はますます重要なものとなるであろう。そのため、委員一人一人が自らの立場を自覚し、教育委員会や公民館などの行政に積極的に働きかけ、新潟市の社会教育を町づくりビジョンの中に生かしていく。こうしたことの実現は、私たち社会教育委員の力にかかっているともしよう。まず、その第一歩として、新潟市の社会教育委員の活動をどのような形で発信し、市民の皆さまに理解していただくかが課題となるであろう。今後、社会教育委員が取り組むべき課題は大きいものがあるが、一人でも多くの市民の方にその意義と活動を理解していただくことができるよう、活動していきたい。本委員に指名された意義の大きさを改めて実感した大会であった。

### **3. 第2日目の活動—第4分科会**

(01)日時 令和元年(2019)11月8日(金) 9:00~12:00

(02)会場 ウェスタ川越(4階・大会議室)

(03)分科会のテーマ 「人材発掘、養成、フォローアップのあり方」(グループ協議)

ファシリテーター;宮地孝宣氏(東京家政大学専任講師・東京都港区社会教育委員)

ゲストスピーカー;岡久美子氏(埼玉県家庭教育アドバイザー・深谷市社会教育委員)

分科会構想「くじ引きやじゃんけんじゃない! 地域の担い手は、こうしてつくられる!」

自分が地域の役割を引き受けたきっかけや決心につながった言葉は何でしたか?

「仕事の引き継ぎ、レクチャーの仕方。バトンタッチの良い方法は?」

(04)所感

今回の大会2日目は、5つの分科会に分かれて行われた。その中で、私が参加した第4分科会は、106名が参加し、活発な分科会となった。埼玉県家庭教育アドバイザーをつとめる岡久美子氏より話題の提供があった後、各グループの協議に入った。参加者が最も関心を持っていた課題は、「地域における社会教育の人材発掘」である。どの地域にあっても、様々な活動に取り組んではいるが、担い手が不足していることが最も深刻な課題であった。各県に共通する課題としては、①キーパーソンがいないこと、②担い手が高齢化していること、③若手が集まらないため、次世代が育っていないこと、などがあり、現状と解決に向けての取り組みを議論した。

これらの課題の原因としては、定年の年齢がこれまでの60歳から上がってきていることが挙げられる。70歳代まで現役で働くとなると、なかなか地域の活動に参加することができない。また、取り組みのPRが不足しているという意見も出された。さらに、地域学習への取り組みが成功している事例がある一方、異動などによって活動を担う人材が代わると、取り組みの質が低下する事例が多いことが報告された。指導者の先生からは、「優秀な料理人を育成するのではなく、レシピをしっかりと作ることが大切である」とのアドバイスがあり、次世代に受け継がれる仕組みづくりが重要であることを痛感した。

新潟市の取り組みの一つの事例として、私からは「中之口YAKKOTE」の取り組みを紹介したが、各県の方々から多くの関心を寄せられた。成人式でたまたま帰省した同級生が故郷のよさに改めて気付き、母校の地域教育コーディネーターを訪問したことから始まった自主的な取り組みであること、補助金などをもらった取り組みでない点など、今後の社会教育の新しい取り組みの一つではないかという意見が多かった。

人づくり、つながりづくり、地域づくり、これらが活動の好循環となるよう、社会教育委員として今後取り組む課題の大きさを改めて実感し、この中之口の事例のような活動がさらに広がるよう、PRに努めていきたい。

また、「社会教育委員の見える化」は、公民館と社会教育委員・地域住民・学校が互いに連携するシステムを作り、広く市民に発信していくことによって実現するものとする。

今回、二日間の大会に参加して、各県の動きをよりよく理解することができた。地域と学校との連携についてみると、新潟市の取り組みは現時点では進んでいることが分かった。このような取り組みをさらに発展させるためには、教育委員会と連携し、地域の活性化と次世代の育成のために、社会教育委員も積極的に活動の提言を行い、小中高が連携した未来図を教育行政の担当者と共に確立し、具体的に実践することが喫緊の課題であると痛感した。